

オーストラリアにおけるアボリジニ観光産業 No. 2

アボリジニ文化の表象について：ケーススタディ no.2

青山晴美

The Study of Aboriginal Tourism in Australia

Representation of Aboriginal Culture and Case Study No.2

Harumi Aoyama

キーワード：オーストラリア Australia, アボリジニ Aborigines, 観光 tourism, 文化 culture

1. はじめに

本稿は、観光立国をめざすオーストラリアにおいて、アボリジニ観光⁽¹⁾を考察するシリーズ no.2 である。前稿⁽²⁾では、以下の点について考察した。

近年、オーストラリアでは、観光産業は、外貨獲得と雇用促進の主要な産業として位置づけられ、アボリジニ観光を持続可能な観光産業のリーダーとして方向づけることになった。アボリジニ観光産業の発展は、アボリジニを経済的に自立させ、民族のアイデンティティの基盤である文化を取り戻し、精神的自立を促す。アボリジニ・コミュニティへの福祉援助の軽減と地域発展という点からも、その効果が期待されている。政府は、マーケット調査や、観光ビジネス立ち上げのための資金援助とアドバイス等を行っているが、様々なマーケット調査結果から以下の結論が導き出された。アボリジニ観光の需要は定期的にある。特に需要の多いイギリス人とドイツ人を中心とした西洋諸国にマーケットを定め、彼らが望む形でのアボリジニ観光商品の提供が望ましい。また、都市部から比較的近距离でのやさしい冒険型、「本物」のアボリジニ文化体験に観光商品を絞ることとされた。

前稿では、ケーススタディとして、現在オース

トラリアで最も成功したアボリジニ観光産業として注目をあびる Tjapukai Aboriginal Cultural Park(ジャプカイ・アボリジナル文化パーク)を取り上げ、アボリジニ観光の成功の秘訣を考察した。

本稿では、アボリジニ観光の基盤となるアボリジニ文化に焦点を当て、アボリジニ観光産業の問題点と今後の可能性について考察する。前稿でのアンケート調査が浮き彫りにしたように、観光客がアボリジニ文化に求めるものは、「現存する最古の人類文化」としての文化である。観光客の関心事は、数万年もの歴史を生き抜き連続と受け継がれてきた、人類の過去をも彷彿とさせる文化である。しかし、「本物」の文化体験という現実の前には様々な問題点が浮上する。まず、何をもって「本物」のアボリジニ文化とするかという点である。1788年、オーストラリアがイギリスの流刑植民地になって以来、アボリジニは「白人」によって虐殺され、その文化は剥奪されてきた。「白人化」教育という目的のために、アボリジニの子どもたちを親元から離し施設に収容することが、1970年代まで合法化されていた。これにより、アボリジニ文化をになう次世代を奪われたアボリジニ社会は急速に衰退した。

しかし、こうした歴史事情にもかかわらず、

今、オーストラリアの観光産業の主要商品としてアボリジニ文化の再構築が急がれる。一度は絶滅をも危ぶまれたアボリジニ文化をどのように再構築し、観光客を魅了する形で表象するかが、観光産業に参与して経済的自立をめざすアボリジニ、あるいはアボリジニ・コミュニティの課題である。

アボリジニ観光は、「白人」に破壊された文化を、観光という舞台上で「白人」客を牽引するために、「白人」が望む「本物」の文化として表象するという矛盾した複雑さを孕んでいる。事態を複雑にしているのは、観光客が望むのは、過去の不変的アボリジニ文化だということである。程度の差こそあれ、いったんは失われた文化の再構築には、個々人が持つ記憶に基づいた解釈が必要となるが、個人的体験がどこまで伝統的なアボリジニ文化を伝えているのであろうか。更に、アボリジニ文化は文字を持たず、文化の基盤となる神話は、踊り、詠唱、岩絵などを通じて伝承されてきた。また、その教えは大変複雑である。こうした文化的特徴を、観光用に誰の目にも分かりやすく表象することの問題が浮上する。

本稿ではまず、アボリジニ文化がどのように認識されてきたのかを歴史的に考察する。オーストラリアにおいて、アボリジニ文化理解の背景を明らかにすることによって、本稿の目的である、観光産業におけるアボリジニ文化の表象に関する問題点がより鮮明になるであろう。今回のケーススタディは、北クイーンズランド州北部にあるヨーク岬半島南東部で展開される観光ビジネスである。”The BAMA WAY Aboriginal Tours”を紹介しつつ、アボリジニ観光産業の実態とアボリジニ文化の表象に関する問題点に考察を加えたい。

2. アボリジニ文化についての歴史的考察

2-1. ヨーロッパ中心主義の偏見

オーストラリアにおいては、アボリジニとその文化に関する知は、伝統的に、西洋の学問体系の中でつくりだされてきた。問題なのは、その知識が、「植民者」vs「被植民者」、「観察する者」vs「観察される者」、「我々」vs「彼ら」と

いう、権力を含んだ不平等な関係で形成されたことにある。ヨーロッパで産声をあげた近代イデオロギーは、人間中心の合理的で科学的、そして二元論を基礎にする論理性に重点をおいてきた。これは西洋文明と同一視され、「普遍的」なイデオロギーとして、非西洋社会に植民地主義とともに広がっていった。同時に、非ヨーロッパ人・原住民を抑圧し、彼らを利己的に利用し排除するための理論として用いられたのである。「普遍的」な極である「西洋」に対して、非西洋は、対極に位置する「特殊」なものとして認識されてきた。

イギリスの流刑植民地に住む原住民として編成された、アボリジニとその文化も、「普遍的な西洋」というパラダイムから逃れることはできなかった。西洋と対比される「他者」つまり「彼ら」という言葉で表現されることになった。アボリジニ文化は、西洋の知識を基盤にする、白人優位の歴史的、階級的表象システムの中で語られて、差別と偏見の対象にされたのである。

「文明」に対して「野蛮」あるいは「未開」と認識され、「白人」に都合の良いように歪曲され理解されてきたのである。そして、アボリジニ文化の研究は、いかに「西洋」とかけ離れ、ユニークであるのかということに主眼がおかれた。こうしたアボリジニ文化に関する知識は、政府のアボリジニ政策の決定要因ともなり、他のオーストラリア人のアボリジニ理解にも大きな影響を与えてきた。^③

2-2. アボリジニ文化と西洋文化との相違

アボリジニ文化は、その多様性と複雑性ゆえにヨーロッパ人の誤解を招くことになった。アボリジニの世界観は包括的で全体的である。人間と他の生命体や自然とは、分離できないと考えられている。多種多様な動植物、そのすべての生命を含む自然、自然現象と同じく、人間やそのすべての行為や努力は、時間と空間を越えた精神的で宇宙的な秩序の表現である。宇宙秩序の起源や意味や高潔さは、決して変わることはない。アボリジニの各部族は、自分が生まれ落ちた土地に関する創造の神話を持っており、同じ土地に住む人間と動植物、自然界のすべて

の存在は根源的に魂を同じくすると考えられている。(4)

これに反して、西洋の概念は、二分法に基づいている。自然と文化、物質と精神、世俗と神聖、主体と客体などの境界線が明確である。ヨーロッパ的な現実の解釈では、人間の業績としての文化は、自然とは分離されたものである。また、知識に関してもヨーロッパ人とアボリジニの間には、大きな見解の相違があり、その結果、環境や科学、テクノロジー、土地や人生のパターン、教育などに別個の解釈が生まれることになった。アボリジニ文化は、長老からのイニシエーションや特別な儀式によって受け継がれる。そこには論破とか挑戦はない。アボリジニ文化では精神的価値を重視するが、物質主義の文化の中で、高度なテクノロジーを獲得したヨーロッパ人からは誤解されることになった。

開拓者とともにオーストラリアにやってきたキリスト教の宣教師もまた、複雑なアボリジニの世界観・信仰を理解できず、自分達の文化・宗教哲学が優位であると信じて疑わなかった。キリスト教の「家父長的温情主義」の伝統から、アボリジニを「黒い異端の子ども達」とみなし、彼らを改宗することが義務だと思っていた。アボリジニは宣教師の権威主義的な方法で、管理され、保護という名の元に多くの自治を奪われた。宣教師により始められた、アボリジニの子どもを施設に収容してキリスト教徒にする方針は、その後、政府によって引き継がれ合法化されていったのである。(5)

2-3. 学問としてのアボリジニ文化

「白人」の開拓地が奥地へと広がるにつれ、アボリジニの伝統的社会は破壊され「白人」との混血化がすすんだが、文化人類学者は、常に伝統的生活を送るアボリジニのみを調査の対象にしてきた。(6) アボリジニ文化は、植民地以前の、物質文明に侵されていない狩猟採集民としての特徴のみが強調されていた。アボリジニは、不変的な人類の過去の遺物のように定義されてきた。伝統文化は、「文明」と対極をなす「未開」なものとしてとらえられ、興味はそこに集中した。「白人」はアボリジニ社会を、時間の中に閉

じ込められた、発展性のない、物質的にも技術的にも進歩が見られない社会だとみなしたのである。

近年のアボリジニ学の学問分野では、文化人類学が長きにわたり、生来もっている本質的な特徴でアボリジニとその文化を説明し、固定概念をつくりあげてきたことを批判している。文化を、時代や社会の変遷に影響されない静的なものとする概念は問題視され、アボリジニ文化の新たな解釈が発展してきた。つまり、文化とは、人間集団が社会的に存在していく上での、社会に対応する表現であり創造だとする、文化のより広義的解釈が主流となってきた。アボリジニの混血化がすすみ、都市への移動という現象に伴うアボリジニ社会の変化は、決してアボリジニ文化の喪失ではなく、文化とはダイナミックに変容するものだとして理解されるようになった。アボリジニ文化が本来持っていると考えられる本質的な特質だけが強調されて、伝統的な部分だけで、アボリジニのアイデンティティがつくりあげられてきたために、伝統文化を維持している「純血」アボリジニだけが「本物」のアボリジニだということになってしまった。伝統的文化によって、アボリジニであることを定義する伝統主義は、結局、「混血」アボリジニを排除してしまっただけではないか。文化とは、人がつくる社会や歴史の中で、また、異文化での接触を通して、自由自在に変化していくものである。このように文化をより広義的に定義すれば、伝統文化の多くを失ってしまったアボリジニを排除しなくてもいいのではないかという理論が浮上したのである。(7)

更に、ヨーロッパ中心主義の反省にたち、アボリジニ文化の解釈には、オーストラリア社会に深く浸透している植民地権力の形を明白にして、人種関係をオーストラリア文化の一つの特色と見る必要があることも提案された。アボリジニ文化を理解するためには、文化解釈に影響を与えてきた、オーストラリアの歴史的、政治的変遷を再度見直すことが大切である。また、アボリジニ文化を「白人」のアイデンティティとの相関関係の中で、議論することの必要性も浮かび上がってきたのである。

以上、アボリジニ文化に関する様々なアプローチを考察したが、従来、アボリジニ文化は、歴史的にも学問的にも「白人」により表象され語られるものであった。しかし、近年、観光という新たな文脈の中で、アボリジニ自身が自己の文化について語るできるようになった。これはオーストラリア史の中で画期的な変化であろう。文化剥奪の嵐の後で、破壊の歴史の隙間をくぐり抜け語り継がれた伝統文化が、観光ビジネスという舞台上、どのように表象されているのかを、ケーススタディを通じてその実態を見ていきたい。

3. ケーススタディ

3-1. The BAMA Way Aboriginal Tours

今回のケーススタディは、クイーンズランド州北部、ヨーク岬半島南東部、ポート・ダグラスからクック・タウン一帯に住むアボリジニのホームランドを巡り、伝統文化を学ぶという体験・教育ツアーである。他のアボリジニツアー同様、政府のアボリジニ観光の奨励により立ち上げられたものだが、当ツアーはコミュニティではなく、個人ベースのビジネスである。



上図
オーストラリア全体図
赤枠内が現地



左図
ヨーク岬半島南東部の
詳細図

ツアー名は The BAMA WAY だが、クク・ヤランジ族のウォーカー兄弟主催の "Kuku Yalanji Cultural Habitat Tour"、同じくウォーカー姉妹主催の "Walker Family Tours"、グーグ・イミサー族ヌガル氏族の長老主催の "Guurubi Tours" という3つの個人ツアーと、北オーストラリアの冒険ツアー "Adventure North Australia" が合体したものである。^⑧ 複数のツアーを組み合わせることにより、より効率よくバラエティに富んだアボリジニ観光を供給し、集客を図る試みがある。尚、それぞれのツアーは個別にも参加できる。BAMA(バマ)とは、現地で広く使用されている、「アボリジニの人」という意味である。しかし、クク・ヤランジ族とグーグ・イミサー族の言葉では、国籍や人種を問わない「人」という意味である。THE BAMA WAY(人の道)という名に、このツアーに対する主催者の意図があるのかもしれない。パンフレットには "Amazing 2 Day Discovery Tour"(驚愕の2日間の発見ツアー)とのタイトルがあり、以下の宣伝文句が書かれている。

「ケアンズ、ポート・ダグラスからクック・タウンとその向こうまで、驚くべき "BAMA WAY"(人の道)を旅しよう。美しい熱帯の北部クイーンズランドを、この土地で何千年の間暮らしてきた人々と見てみよう。出会う言葉、文化、人、景色もすべてが異質な驚きの旅になるだろう。世界遺産の熱帯雨林、息を呑む山の尾根を越え、オーストラリアの奥地に広がる広大な大地を、そしてサバンナの丘を歩く旅が、他のどこにあるだろうか」

当ツアーは、アボリジニ文化体験の他に、オーストラリアの誇る自然遺産である熱帯雨林を奥深く進み、キャプテン・クックが上陸した地点として有名なクック・タウンの観光も加えることで、多目的な観光客の要求に答えている。

「都市部から2,3時間のアクセス、ソフトアドベンチャー型、「本物」のアボリジニに出会い、文化体験ができる」という、アボリジニ観光のマーケット調査結果をも意識したものであろう。更に、主要観光客であるヨーロッパ・北米からの旅行者をターゲットにしていることも伺える。太陽と自然、ビーチを夏のパッケージに求める彼らにとっては、異文化体験を含むオースト

ラリアの熱帯雨林での休日が楽しめる。日本語ガイドもなく、短期滞在型・都市型旅行者である多くの日本人にとっては、アボリジニ文化に特別な興味がなければ参加は難しいであろう。今回の参加者は、イギリス人の母子、オランダ人家族、フランス人とオーストラリア人の大学生、アボリジニ観光の取材目的のオランダ人のジャーナリストと同じ目的の日本人である著者の合計 10 名であった。彼らはいずれも、宣伝文句にあるオーストラリアの大自然を体験し、そこに生きてきたアボリジニの伝統文化を知りたいという目的で参加していた。

3-2. Kuku Yalanji Cultural Habitat Tour

参加者は、ケアンズ市内の各ホテルに迎えに来る 4WD で、海岸線を一路北上する。最初の目的地は、ポート・ダグラスから北へ 15 分のクーヤビーチだ。クク・ヤランジ族のふたりの兄弟による先祖伝来のアボリジニの魚獲りを体験する。このアボリジニ観光ビジネスは政府奨励の ITA[®]のプログラムは利用せずに、兄弟で始めた全くの個人ビジネスである。ITA はビジネス開始までのプロセスと提出書類が複雑なので、利用するアボリジニは決して多くはないとのことであった。

観光客はクク・ヤランジ族先祖伝来の文化を体験するのだが、原始の形をとどめ、観光地化されていないビーチの景観も売り物のひとつである。部族のテリトリー内での個人のプライベートビーチにて、参加者は浅瀬に入り 2 時間余りモリで魚を追いかける。その後、沼地に生息するマングローブの林を歩き、浜辺に生息する植物についての説明を受ける。その後、浜辺に建つ兄弟の家のベランダで、獲った魚を焼きながら、アボリジニの伝統的な生活についての話を聞く。親族を中心とする社会生活に関する簡単な説明があり、最後は、ディジュリドゥーの演奏で終わる。

全体の設定としては、オーストラリアの自然を満喫しながらモリを持って魚を追いかけるといふソフトアドベンチャーと、表面的ではあるがアボリジニ文化に触れるという休暇型観光目的を満足させるものであろう。特に、太陽を求

めるヨーロッパからの参加者には、海辺で過ごす午後を楽しんでいる様子が見受けられた。



浅瀬での魚獲り モリを片手に魚を追いかける

3-3. Walker Family Tours

その後、熱帯雨林を走り抜けブルームフィールド滝へと向かう。同じくクク・ヤランジ族の、前述の兄弟とは親戚関係にあたる女性たちが、スピリチュアルシンボルである滝を案内するツアーである。「フレンドリーなアボリジニのシスター達があなたを暖かく出迎えて、ブッシュを歩き、彼女達の特別な世界を共にする」とパンフレットには書いてある。ワニのいる川辺りの岩場で待っていたのは、数名のアボリジニ女性だった。



聖地である滝

アボリジニ文化では、各部族に、土地や自然景観にまつわる神話が必ず传承されているが、聖地である滝にまつわる説明や神話を、彼女達から聞くことはなかった。最初に、「質問があれば

ばなんでも聞いてほしい」と言われたが、アボリジニ文化や歴史をほとんど知らない観光客にとっては、何を質問していいのかわからず、参加者には困惑した表情が浮かんでいた。アボリジニ女性たちはほとんど何も語らずに岩場を歩き、我々を滝に案内した。筆者が滝にまつわる神話を教えてほしいと質問をしたところ、はっきりとした答えは返ってこない。

語らない理由を推測してみると、まず、アボリジニ伝統社会には、文化の継承者として、年齢や性別に厳しい条件が課せられていた。誰でもが同じ文化を共有できる社会ではなかったため、彼女たちが、部族内で神話を伝承する正統なる継承者だったのかは不明である。更に、重要な問題としては、白人化教育によりアボリジニ文化が継承されていないという歴史的事実がある。何世代にも及ぶ子どもの施設送りで、アボリジニ文化の継承は困難となった歴史がある。案内の女性たちもまた、施設で育った経歴の持ち主である。アボリジニ女性は元来あまり語らないし、語るべく神話を継承していないならば、アボリジニ文化を学ぶという目的をもった観光客には、満足のいくものではないであろう。

筆者の、聖地にまつわる質問に対して、「私たちは今でも白人に管理されている。白人はすべてを奪った」を繰り返すアボリジニ女性の言葉の裏に、すべての答えが隠されていると思われた。筆者以外はすべて「白人」観光客であり、自分たちから言語文化を奪った「白人」に、「文化」を見せなければ経済的自由は得られないという複雑な心情が伺われた。そして、語るべき「文化」の多くは奪われてしまったという現実がそこにある。滝の背後に本来存在していたであろう、売り物となるべき「文化」がないのならば、「ここは聖地だ」という言葉を繰り返すことしかできないであろう。

観光客は、何も話さずに滝と岩場で写真を取り車に戻った。彼らはパンフレットにのっているように「フレンドリーなアボリジニ女性」との会話を楽しみ、伝統的な暮らしや文化について話を聞くことを期待していたと思われる。観光の宣伝文句と現実との違和感を感じていたのであろう。文化喪失の裏にある「子どもの施設送り」という事実を知らなければ、観光客にと

っては、不満が残るツアーであったかもしれない。

もしも彼女たちが文化喪失を隠すのではなく、逆にその歴史的事実も、ひとつの観光商品として企画して、観光ビジネスにのせたら興味深いツアーになるのかもしれない。「観光客の欲するのは、アボリジニの伝統文化のみである」という思考から抜け出し、「文化喪失」という新しいテーマでのアボリジニ観光を打ち出したのなら、オーストラリア史的一幕を飾る有意義な歴史ツアーにもなるかもしれない。特に、2008年に、オーストラリアの新首相ラッド氏が、首相として初めて公式に「アボリジニの施設送り」についての謝罪を行った。こうした社会的流れのなかで、reconciliation Australia(和解のオーストラリア)が合言葉となり、補償も含め今後どのようにこの問題について対処すべきなのかが様々な分野で議論されている。アボリジニ観光においても、文化喪失という歴史を、観光用にアレンジして公に訴えていく可能性もあるだろう。

以上2つのツアーは、クク・ヤランジ族の個人ビジネスであるが、クク・ヤランジ族は、コミュニティベースの観光ビジネスとして“Kuku Yalanji Dreamtime”をたちあげている。ホームランドであるモスマン渓谷の熱帯雨林を歩きながら、植物の生態と食用方法、生活の智慧、樹皮でできた小屋、ロックペインティングの説明などのツアーを行っている。しかし、女性の聖地である泉に、男性観光客の入場を許可するなど、性により厳しい規制が設けられているアボリジニ社会の、本来のあるべき姿とは矛盾したものになっている。より多くの観光客を牽引するために、文化の根幹に関わる部分を削除しなければならない現実がそこにある。この意味からすれば、アボリジニ文化は、もはやアボリジニ社会から離れて、観光用に見せる文化に変容しつつあると言えよう。これまで開発の手が加えられなかったヨーク岬半島の熱帯雨林も、観光という名の元に森林伐採がすすんでいる。4WDで熱帯雨林の冒険という要素も加わる当ツアーでは、途中、道をつくるための森林伐採の現場に何度か遭遇した。狩猟採集経済を営むアボリジニの文化は、自然に立脚したものであ

る。その大本である自然を破壊する上に成り立つアボリジニ文化観光というものの自体の矛盾を見る思いであった。

滝の見学の後は、更に北上してキャプテン・クックの上陸地点であるクック・タウンに向かいここで一泊した。



キャプテン・クックの上陸地点

3-4. Aboriginal Rock Art Tour Guurrbi's Tours (The rainbow serpent tour)

翌朝、最後のアボリジニ観光に向かう。ヌガル・ワラ氏族の男性が、クック・タウンから車で40分の場所にある岩場を案内して、岩絵を通してアボリジニ文化を解説するツアーである。サバナ気候の台地には、大小様々な岩が折り重なるように点在し、砂岩の絶壁もある。観光客は岩の間を歩いたり登ったりしながら、合計6個の岩の内側に描かれた絵についての説明を聞きながら、背後にあるアボリジニの実用的かつスピリチュアルな世界を学ぶというものである。当ツアーは、「オーストラリアでのしなくてはならない経験のひとつ」として紹介され、アボリジニツアーの賞も獲得している。「アボリジニ文化と社会への驚くべき洞察を与えてくれる」との観光案内文に引かれて、期待してツアーに参加した。「The Reconciliation Cave」(和解の洞穴)や「An Ancestral Birthing Site」(先祖の誕生の場所)と名づけられた、洞穴内部に描かれた絵の解釈をしてもらう。先祖の誕生の岩は、実際に、この岩絵を巡るツアーの主催者の祖父が生まれた場所である。男性の語りは、筆者が

南オーストラリア大学大学院のアボリジニ学部で、アボリジニ文化として学習したものと必ずしも一致していなかった。人の誕生にまつわる「スピリット・チャイルド」という概念や「ソングライン」⁽¹⁰⁾についても、彼の部族あるいは氏族ではどう取り扱われているのかを質問したが、回答は得られなかった。また、和解の岩絵の説明も、筆者がアボリジニ文化として理解している範疇を超えたものであった。岩絵と岩絵の背後にある話は、彼の個人的親族、あるいは氏族(ちなみにグーグ・イサミー族には言語別に32の氏族がいる)で伝わっているものなのか、また部族に伝わっているものなのかが明示されていない。



岩絵

総括して、当ツアーで語られるアボリジニ文化には、筆者が学んだ学術的に認知されているアボリジニ文化に関する知識との間に、ギャップを感じざるを得なかった。もちろん、筆者が学んだことがアボリジニ文化全体を網羅しているとは言えない。しかし、観光産業におけるアボリジニ文化の表象という点についての的を絞れば、問題なのは、観光客は個人的な話をアボリジニ文化全体にまつわる話だと、誤解する可能性もありうることである。筆者は、文化の表象に関して、決して個人的体験を否定するつもりはない。「アボリジニ文化」という構築された知識上での、個人的体験は意義深いものである。しかし、個々の体験はそれぞれに異なるものであり、即アボリジニ文化として認識されることへの疑問がある。

事実、アボリジニが個人的経験から得られる

知識を、教育の場でどのように位置づけるべきかに関しては、アボリジニ学部でも議論が紛糾した。個人的経験に基づく知識が、真の知識の探求になるのか。それならば、個人的経験を持つアボリジニだけが、アボリジニ文化について語るができるのか。それは、アボリジニ文化を学問として学ぶ、非アボリジニ研究者を排除することにつながるのではないか。また、ひとりのアボリジニの文化的経験が、すべてのアボリジニの共通経験と言えるのか。個人により、経験には幅もあり内容も違うはずである。もし経験が学問上で制度化されたなら、テキストのみで参加している研究者は排除されるのか等の様々な議論がなされた。今回のツアーでは、まさにこうした議論を実験した思いであった。ツアー同行者のひとりにアボリジニ学部で学んだアボリジニ文化について話した時、「だって、あなたはアボリジニじゃないでしょ。本物のアボリジニが言うことには間違いないわ」とのコメントが返ってきた。多くの観光客にとり、本場オーストラリアで「本物」のアボリジニからの語りは、それがなんであれ「本物」のアボリジニ文化となるのかもしれない。

しかし、見落としてはいけないのは、同じ個人的体験でも、専門機関あるいは学術的に、アボリジニ文化がどのように語られているのかを学んだ上での個人的経験は、ただ単なる経験のみでの語りとは違うものになるはずである。個人的経験とそれに支えられる個人的解釈は、特に、文字で伝承されていないアボリジニ文化では誤解を生じやすい。解釈により、文化に伝承される意味は変えられるからである。個人の記憶の中に存在する話は、個人の体験とまじり独自の解釈にと発展していく可能性もある。

オーストラリアの観光ビジネスとして、世界中の観光客を招聘するのならば、アボリジニ文化に関する歴史的考察や、学術機関での専門知識の土台も必要であろう。そうすることにより、アボリジニとしての個人的経験は、より信頼を得る解釈にと導かれるであろう。こうした観光ビジネスを展開したならば、より深みのあるアボリジニ文化体験につながるであろうし、世界に向けて素晴らしいアボリジニ文化を発信できると確信する。

5.観光産業におけるアボリジニ文化の表象の問題点

以上、3ヶ所をめぐるアボリジニの文化ツアーでは、それぞれに異なる形でアボリジニ文化を表象していた。「白人」観光客のニーズに見合う形で、アボリジニ文化をいかに魅力的に表象するかに努力していると言える。また、アボリジニ観光の成功の鍵を握るのは、体験型であること、幅広い年齢層に関心を持たれること、個人でもツアーでも楽しめることにあるとの調査結果に答えたものであった。

観光客が望むのは、アボリジニ社会と文化全体にかかわる本質的なものであるが、アボリジニ文化には観光用に表象するために困難な点があいくつかがあげられる。元々、アボリジニとは「白人」の侵略以前のオーストラリアにおいて、300・500の異なる言語部族に分かれて住んでいた先住民の総称である。根本的な生きる哲学や思想は同じだったが、それぞれは異なる部族社会を形成していた。日本人の日本文化というような文脈で語られる文化とは、異なる側面がある。また、口頭で伝承されてきた生きる規範となる神話は、その受け取り手に性別や年齢に厳しい制限があり、社会の構成員それぞれは、文化にまつわる異なる知識を持ち合わせていたことになる。誰でも同じ文化を共有できる社会ではなかったのである。更に、事態を困難にしているのは、歴史的にアボリジニ文化の継承に断絶の時期があるということである。「白人」との接触の時期により、文化の崩壊の時期と程度は異なるが、「白人」の侵略からまぬがれた部族はいない。

観光客があくまでも「侵略前の過去」の文化に関心がある以上、過去の再構築が必要不可欠となる。祖父母や両親、周りのおとなから個人的に聞いた話を思い出し、過去を分析し、観光用に表象するプロセスが必要となる。観光客用に文化を再構築するためには、文化をシンプルに見せる工夫もいる。本来、複雑なアボリジニ文化の概念を、どの文化圏からの旅行者にも分かりやすくするためには、「a single', 'simple, a true story」(簡単なひとつの本物の話)に集約する必要がある。あいまいな部分は削除され、文

化略奪により消えてしまった部分は解釈論の世界にと広がる。この意味からすれば、アボリジニ社会は、文化を保持したり分析したりする、複雑な記憶とパフォーマンスを必要とする社会へと変貌しつつあるのである。文化に内在するイメージやアイデアをどのように表象するのかは、観光客が望む形となるが、その形とは、伝統に対するノスタルジアでもある。そこには、何万年も前の人類の過去や、アボリジニのスピリチュアリティに対するロマンスのようなものが見え隠れする。しかし、観光ビジネスでは、そのロマンティックなイメージの裏に潜む、オーストラリアの暴力的な歴史は見えてこない。例えば、聖地である滝の前で、神話を語れないアボリジニ女性たちが、実は、施設に收容され、アボリジニ文化を学ぶ機会を奪われたためであることは、多くの観光客には見落とされがちだ。滝の美しさの陰に潜む、「白人は私たちから何もかも奪っていく。すべてを白人に管理されている。今も昔もと」と、言葉少なく語るアボリジニ女性の悲嘆にくれる瞳が、何よりも史実を語っていることに注意を向ける観光客がどれほどいるだろうか。

6.おわりに

アボリジニ文化は、今も変わらずヨーロッパ社会との関係の上に成り立っている。かつて、ヨーロッパから来た文化人類学者が、伝統的なアボリジニ文化のみを調査の対象にしてきたように、観光産業においても、ヨーロッパ文明に侵されていない狩猟採集民としての、植民地以前の形のみが強調されている。アボリジニ文化は、時代の変遷にかかわらず、無変化で同質なものとして理解され、アボリジニの特色が強調された伝統的な部分だけが、アボリジニのアイデンティティを形成する材料になっているという点では、昔も今も変わらない。しかし、今、観光産業においての大きな分岐点は、アボリジニ自身が彼らの伝統文化を語っていることである。これは喜ばしいことではあるが、一方、観光産業の台頭により、アボリジニの文化的象徴は、商業的可能性に改宗させられた。例えば、先祖代々受け継がれた岩絵は、神話のひとつの伝達

手段であり、コミュニケーション手段でもあったが、観光産業では、本来のアボリジニ社会という文脈から離れ、観光商品として我々の目の前に現れる。日々の生活からかけ離れた、観光客に見せる、あるいは語るモノとしての意味に変えられていく。観光産業に巻き込まれるアボリジニの人々は、「白人」の観光客が、「アボリジニ文化のあるべき形」だと望む形に、自己の文化を変えていくのである。かつて、「未開」であり「野蛮」だとして、差別や偏見の対象とされてきた文化は、現在では、オーストラリアの観光産業を支える目玉商品である。その目玉商品をつくりだすためには、アボリジニ文化に存在する、失われた過去のすきまを、個人的に受け継がれた記憶で埋める必要がある。しかし、個人の記憶のすきまに、記憶の解釈をすることには限界がある。そこでつくりだされるのは、過去に対する理解や説明に関する複雑な網目である。アボリジニの歴史を分析する個人の記憶の糸は、思い出し、より記憶を洗練して、関係者や学術研究者と議論をして確認していく作業が常に必要となるであろう。過去を可能な限り解釈をして、記憶をより幅広い形で認識して、これを観光用に推し進めれば、新たな形でのアボリジニ文化に変容するのかもしれない。その意味からすれば、観光産業は、アボリジニ文化を含むアボリジニ性(Aboriginality)の新たな入り口を構築していると言えよう。(11)

最後に以下のことを付け加えたい。部族としての共同ビジネスばかりでなく、個々人が自由にビジネスをたちあげれば、そこに競争が生まれ、部族内に不協和音と経済的格差が生まれる可能性がある。アボリジニ社会は、伝統的には平等であり、また「白人」優先社会においては常に「持たざる者」として、同じ立場を共有してきた。しかし、今後、観光産業の成功によって「持てる者」と「持たざる者」が生み出され、本来平等を享受していた社会は、根本からくつがえされるであろう。危惧されるべき問題である。

注記

注1 本稿では、アボリジニ観光とは、アボリジニアート等のアボリジニ文化の展示を見たり購入するこ

と、またはツアーや個人的に、アボリジニ・アボリジニコミュニティを訪れることと定義している。

注2 愛知学泉大学・短期大学研究論集 第43号

注3 18世紀末には、所有の概念にとらわれず狩猟採集するアボリジニのシンプルライフは、自由主義を謳歌するヨーロッパ知識人の間では、「高貴な野蛮人」と賞賛された。しかし、オーストラリアという辺境の植民地で、アボリジニの土地を奪うことに日々格闘する囚人や移民にとっては、アボリジニはただの「野蛮人」であった。神をもたず無政府状態で暮らす攻撃的な人食い人種、そして性的なモラルをもたない「野蛮人」というイメージをつくりだしたのである。アボリジニを最低レベルの知能と文明しか持たない「野蛮人」とすることで、アボリジニを虐殺し土地を奪う開拓者の非人道的な行為を正当化したのである。19世紀の科学の発展にともない、「野蛮人」の概念は「骨相学」という似非科学に裏づけされ、「人種主義」へと発展していきアボリジニへの差別は制度的に確立されていった。詳細は青山(2008)参照。

また、アボリジニ文化と「知と権力」との関係については、Attwood(1992)に詳細を譲る。

注4 アボリジニ文化の根幹を成すのはアボリジニ独自の「創造の時代」の概念である。形のない物体から生まれた先祖の霊的な存在たちは、世界を自由に歩き回り、森羅万象を創造し命を吹き込んだ。

注5 宣教師ならびに政府によるアボリジニの子どもの施設送りについては、青山(2008年)参照。

注6 アボリジニ文化に関する知識を提供してきた優位な学問領域は、常に文化人類学であったが、参与観察、データの収集、文化の記述を行った。過去において、「文化的他者」をただ単に記述することが民俗誌の特徴だった。

注7 詳細はCowlshaw(1990)を参照

注8 北クイーンズランド州のアボリジニの歴史に関しては、Reynolds(1993)に詳細を譲る。

注9 Indigenous Tourism Australia(先住民観光局)の略称。2005年にTourism Australia内に設立。機関設立の目的は、アボリジニ観光をオーストラリアが目指す持続可能な観光産業のリーダーとして方向付け、観光ビジネスに必要な能力・技能トレーニング、また資金援助を行う。

注10 「スピットチャイルド」とは、子どもの魂のことだが、妊娠は肉体だけの問題ではなく、魂が入り

なければ成立はしないと考えられる。魂は親を選び、自分が生まれることを知らせようとする。

「ソングライン」とは、神話で結ばれた道とも解釈できる。天地創造の神話上で Ancestral spirit beings が旅をした道である。神話は歌になっているのでソングラインと呼ばれるが、Dreaming track とも言われる。オーストラリアの大地には、神話を知るアボリジニだけが知っている夢数のソングラインが張り巡らされているとされる。

注11 近年、学術分野においては、アボリジニ性は社会的に構築されるものだとして理解されてきた。植民地時代から、アボリジニとその文化を固定化して分類してきた本質主義に対する反論である。アボリジニは「悲劇的で原始的、生きた化石のような存在、白人社会での受身的弱者」ではなく、「白人」との関わりの中で、アボリジニ文化はダイナミックに変化し続けてきたし、アボリジニは自らの意思で「白人社会」に生きるために「アボリジニ」になっていったとする解釈である。詳細は、Attwood(1989)に譲る。

参考文献

- ・青山晴美「アボリジニで読むオーストラリア」、明石書店、2008年。
- ・青山晴美「女で読み解くオーストラリア」、明石書店、2004年。
- ・Attwood,B.,1989, *The making of the Aborigines*, Allen & Unwin. Sydney, NSW.
- ・Attwood,B & Arnold,J, (eds), 1992, *Power, Knowledge and Aborigines*, La Trobe University Press, Victoria.
- ・Cowlshaw,G.,1990, "Helping Anthropologists: cultural continuity in the construction of Aboriginalists", in *Canberra Anthropology*, Canberra, vol.13(2), pages 1-28.
- ・Reynolds,H,(ed), 1993, *Race relations in North Queensland*, Department of History & Politics, James Cook University, Queensland
- ・www.tourism.australia.com
- ・www.indeginoustourism.australia.com